

賢治童話における〈自然〉と〈異世界〉

井上寿彦

1.

賢治童話を〈自然と人間〉というキーワードで読んできた。発表したものは次の通りである。

「鹿踊りのはじまり」、「狼森と筑森、盗森」、「かしはばやしの夜」、「野から森、そして林へ—宮沢賢治作品試論—」『東海学園 国語国文 第39号』平成3年3月、「注文の多い料理店」、「水仙月の四日」、「イーハトヴ童話『注文の多い料理店』における〈自然と人間〉」『同 第45号』平成6年3月

この稿ではさらにいくつかの童話を〈自然と人間〉をキーワードにして読みながら、賢治童話の〈自然と人間〉の意味を探っていきたい。

「氷河鼠の毛皮」

イーハトヴ発ベールリング行きの汽車のなか「顔の赤い肥った紳士」が、ラッコや海狸や黒狐の外套に身を包み「それから氷河鼠の頸のこの毛皮だけでこさへた上着」を自慢げに着込んで、これから「黒狐の毛皮九百枚」をとるために北極近くまで猟にでかけると豪語している。「イーハトヴのタイチ」である。列車には「瘦た赤ひげの人」とか「若い船乗りらしい男」も乗っている。

賢治童話における〈自然〉と〈異世界〉

夜が明けて汽車が急停車する。乗り込んで来たのは、ピストルをかまえた「赤ひげ」に導かれた熊の集団だった。熊の間諜だった「赤ひげ」は、罪状を数え上げて第一にタイチをつれ去ろうとする。その瞬間「船乗りらしい男」が、「おい、熊ども。きさまらのしたことは尤もだ。けれどもなおれたちだつて仕方ない。生きてゐるにはきものも着なけあいないんだ。おまへたちが魚をとるやうなもんだぜ。けれどもあんまり無法なことはこれから気を付けるやうに云ふから今度はゆるして呉れ」と叫ぶと、熊たちが「わかつたよ」と応えて、流血事件になるのは避けられる。

という、これは〈自然と人間〉の関係が最もストレートに描かれた筋立てになっている。財力と奢侈にまかせて動物を乱獲する。その際限のない無法に動物たちが報復にでる。

遊び半分の狩猟といい、それに対する被害者熊たちの反撃といい、反撃の失敗といい、これは「注文の多い料理店」の構図によく似ている。「料理店」より人間の傲慢さや動物乱獲のひどさは鮮明である。

「祭の晩」

「祭の晩」は、山の神の秋祭りの晩に、亮二少年が「顔の骨ばって赤い」「眼はまん円で煤けたやうな黄金いろ」の「大きな男」に出会い、その男が団子を二串無銭飲食したというので「村の若い者」か

らいじめられているのを目撃する。「薪をあつて百把持って来てやっから、許して呉れろ」と懇願する大男を、村の若い者たちは、「おれはどうもきさまの物云ひが氣に食はないのでな。やい。何つうつらだ。こら、貴さん」と責め、揚げ句「ぶん撲れ、ぶん撲れ」という騒ぎになる。亮二は「悪い人でない。却って正直な人なんだ」と思い、その大男を「ただ一枚残った白銅を出して」助けてやる。大男は「薪を百把あつて返すぞ。栗を八斗あつて返すぞ」といい残して逃げ去る。みんなはそれを山男だといひ、家に帰って亮二から話をきいたお爺さんも「そいつは山男だ。山男といふものは、ごく正直なもんだ」と答える。その時大きな音がするから外へ出てみると、「太い薪」や栗が山のように積まれている。山男がお礼を団子屋でなく亮二にもつてきたことに、お爺さんは「山男もずるぶん賢いもんだな」と感心し、「こんなに貰ふわけには行かない。今度何か山へ持って行って置いて来やう。一番着物がよからうな」といひ、亮二も「今度夜具を一枚持って行ってやらう。山男は夜具を綿入れの代りに着るかも知れない。それから団子も持って行かう」と、山男の正直さに興奮して応じる。

人間の中に入ってきた山男を異類として排除しようとする村の者に対して、亮二とお爺さんは、落ち度があったとはいへ純朴な山男に同情と理解を示している。

山男は「山男の四月」でもそうだが、人里がかなり危険だと知りながら下りて来る。何故下りて来るかといえば、人とのつながりを求めているのだと言える。これはその結果の失敗である。

「狼森と策森、盗森」の山男の悪戯もこれと同質といえる。策森の山男は自ら栗餅を請求する男だが純朴さはかわらず、農民たちもそれに快く応えている。

「祭の晩」の時代は、その「策森」よりはずっと後のことだから意地悪な村人も出てくるが、亮二とお爺さんは、その山男とのつながりをきっちり持っている。人間と山男の関係は、「祭の晩」も

「狼森と策森、盗森」と同じか、少し悪くなった程度とみていいだろう。

「フランドン農学校の豚」

「フランドンの農学校の豚」は農学校に飼われている豚が、人工的に上等な肉に仕立て上げられた果てに、教師や生徒たちのための食に屠殺されるまでを皮肉っぽくユーモラスな筆致で描いたものだが、農学校の教師とくに校長は狡猾な人間に描かれている。豚は神経質でなかなかの知力が付与されているだけに、みずからの宿命に煩悶し、結果殺されていく。〈自然と人間〉をキーワードとして読む場合、豚を〈自然〉として読むことに無理があるともいえる。豚は家畜であることを前提にすれば、この物語には〈自然〉がない。家畜であるからこの悲劇が起きるのだけれど、人間の家畜にされていること自体が反自然ではある。自然の冒涇といつてもいい。本来なら豚の方から人間に反撃に出るべきところを、手も足もでないのは、飼い馴らされた結果である。それが家畜ということに他ならない。農学校の教師たちは凶暴ではないけれど、豚に対して強権をもっている。去勢された自然にとって最も横暴なのは人間といつてもいい。

「オツベルと象」

人口によく膾炙されたこの物語の主人公オツベルは「稲扱器械の六台も据えつけて」「十八人の百姓ども」を雇い使用する小資本家である。そこへ「白象」がやってきた。オツベルは言葉巧みにその無欲で働き者の象を手なづけてしまう。そしてしっかりと自分の生産組織に組み入れる。ところがその象を「オツベルはすこしひどく過ぎた」。疲弊した象は「みんな出て来て助けてくれ」と仲間の手紙を書く。山の象は「一せいに立ちあがり、まっ黒になつて吠え」オツベルをやっつけに攻めてくる。象の集団は塀を破って白象を救済する。「オツベ

ルはケースを握ったまま、もうくしやくしやに潰」されてしまう。

無幸の白象をほとんど無償でこき使うオツベル。それはまぎれもなく搾取なのだが、そのままでは済まなかった。象たちは復讐した。その結果オツベルは殺されたのか。おそらく殺されていないだろう。

横暴な人間が復讐されるというものに「注文の多い料理店」と「氷河鼠の毛皮」があった。この二作品に関しては、復讐の結果、人間が手ひどい打撃を被ったという程度で、作者賢治は終わらせている。

「なめとこ山の熊」

なめとこ山で熊狩りを業とする淵沢小十郎は、「注文の多い料理店」や「氷河鼠の毛皮」で狩猟をもてあそぶ狩猟家とは違っている。「熊。おれはてまへを憎くて殺したのでねえんだぞ。おれも商売ならてめへも射たなけえならねえ。ほかの罪のねえ仕事していんだが畑はなし木はお上のものにきまつたし里へ出ても誰も相手にしねえ。仕方なしに猟師なんぞしるんだ」と熊にいう猟師である。だから「なめとこ山あたりの熊は小十郎をすきなのだ」ということになる。しかし狩る側と狩られる側の関係は厳然としてどうしようもない。狩猟を続けるある日、小十郎はかねて目をつけておいた大熊に逆に襲われる。その最期小十郎は、「お、小十郎おまへを殺すつもりはなかった」という熊のことを遠くに聞き、小十郎も「熊ども、ゆるせよ」とつぶやくのである。小十郎の死顔は「まるで生きてるときのように牙え牙えして何か笑ってゐるやうにさへ見えた」というのだ。これは「注文の多い料理店」の若い紳士が、山猫に襲われて命は落とさなかったが、顔が「紙くづのやうになつた」というのと全く違うという違いだろう。

2

これまでに賢治の作品の中で「鹿踊りのはじまり」「狼森と策森、

賢治童話における〈自然〉と〈異世界〉

盗森」「かしはばやし夜」「注文の多い料理店」「水仙月の四日」「氷河鼠の毛皮」「祭の晩」「フランドン農学校の豚」「オツベルと象」そして「なめとこ山の熊」と十作品を〈自然と人間〉というキーワードで読んできた。

描かれた〈自然〉が最も強いものから、その威力がだんだん衰えていくものというふうにランクづけをしてみると、まず「水仙月の四日」と「鹿踊りのはじまり」は最上位にくるであろう。「水仙月」の自然は、雪婆んご・雪童子・雪狼で象徴される吹雪。人間は子ども。吹雪に巻かれて危うく命を落とすところを雪童子に助けられる。自然の恩恵を受ける人間が、こういう形で描かれたとも読むことができる。

「鹿踊り」の自然は原始の時代の原野の鹿。なにもものにも煩わされずおおらかに生を楽しんでいる。そこでは人間の影は薄い。純朴な農民すら侵すことのできない揺るぎない自然世界が構築されていて、人間の入り込む隙間もない。

次に位置するのが「狼森と策森、盗森」と「祭の晩」。「狼森」の自然も強く優しくゆったりと構えている。農民たちは森に開拓の許可を得、感謝の気持ちを忘れない。だが開拓の手を広げ富の蓄積が進むと、「鹿踊り」の嘉十のように無欲無心ではない。だから森の方にもいささかの警戒心が生じた。それでも森と農民はうわべは何事もないように一応は装うことができる。

「祭の晩」の山男は、村人から不快な仕打ちをされても仕返しをしようとは思わない。きつちりと自分の生き方を通し、その器の大きさに心からの敬意を、子どもや老人は払う。「狼森」の農民たちと同様、人間はなにがしかのお札を自然つまり山男にお返ししようとする。

「なめとこ山の熊」の自然である熊社会は、厳しさと同時に温かさを持っている。妥協を許さないのは自然の掟でもある。その強固な社会へこれも強靱な人間小十郎が入っていく。熊を狩る。それは人間による自然への侵食である。しかし小十郎も人間社会では弱者である。

だから分かり合える部分もあるのだが、両者にとって相手は食うか食われるかの存在である。ここに並べた十編の作品の中で人間が殺されるのはこの「なめとこ山」だけである。

以上は、〈人間〉より〈自然〉が優位の物語といえる。この場合、人間で登場するのは子どもや老人、それに素朴な農民・狩人であるがそれらは、不動の自然に対して畏怖と感謝の念を共通してもっている。強大で、人間の前にすくくと立っていた自然。その中で知恵と富とで力をつけてきた人間が、相対的に力を喪失していく自然の上位に立つとうとする。その物語が次の五編である。

まず「かしはばやしの夜」。かしはばやしの柏の木は、木を伐る清作を許さず断固抗議する。清作には柏の抗議が理解できないばかりか、かしはばやしをも軽視し、自然にたいする感謝の気持ちなどみじんもない。清作と柏との喧嘩の間に立ったのが画かきであるが、仲介に失敗してそれも逃げ出してしまふ。かくして〈人間〉と〈自然〉との間には埋めることのできない断絶が生ずることになる。

次は「注文の多い料理店」「氷河鼠の毛皮」「オッベルと象」。

これらに登場する人間はみなそれなりの強者である。金持ちであり飛び道具か生産手段を所有している。それらでもって動物を不当に殺したり搾取したりする。その動物たち山猫・熊・象が本気で反撃に立ち上がる。場合によっては人間を殺しかねない形相である。しかし結果は人間を殺すには至らない。

なぜ殺せなかったか。自然の側の寛大さ寛容さは測りしれない。

「フランドン農学校の豚」の農学校の校長や教師は、先の小資本家や商人のようにあくどくもないし強くもない。しかし豚はどうか。家畜としての、人間に食われることを前提として飼われる豚に野性はない。自然性は完全に奪われている。〈人間と自然〉で考えるなら、人間によって自然性を奪われた豚は最も非力な自然と位置づけることはあながち間違っていないだろう。

注 拙論「オッベルと象」小論（『東海学園女子短期大学国文学科創設三十周年記念論文集 言語・文学・文化』平成十年四月一日及び『東海学園国語国文』第53号平成十年三月）参照

3

〈自然と人間〉のキーワードで読んだ童話を「宮沢賢治の方法」の表(1)に照合してみる。

A-Ⅰに属するものはない。

A-Ⅱに属するもの。

「水仙月の四日」

「フランドン農学校の豚」

B-Ⅰに属するもの。

「かしはばやしの夜」

「鹿踊りのはじまり」

「注文の多い料理店」

「狼森と叢森、盗森」

「なめとこ山の熊」

B-Ⅱに属するもの。

「氷河鼠の毛皮」

「祭の晩」

「オッベルと象」

C型に属するものはない。

A型に属する二作品は、「異世界の物語」つまり「動物・植物等が主人公の作品」のうち特にA-Ⅱ「人も登場するが、動物等との交流はない。視点は異世界側にある。」とした分類帯に属する。

「水仙月の四日」は吹雪の世界が中心で、子どもは登場するが吹雪との会話は無い。「フランドン農学校の豚」は、登場人物のうち校長

とだけ豚は話すが、全体は豚中心の物語であるとしたものである。

A型は原則として人間以外の「異世界」だけの物語だから、「人間」との関連はないはずであるが、「水仙月の四日」と「フランドン農学校の豚」では、はからずもその重要でないとした人間との関係で浮かび上がってきたものである。仮にここに登場する人間を重要と考えれば、B型に入れなければならないのだが、いわばこの矛盾は、異世界を中心に据えて分類するという単純な割り切り方の結果から起こったものである。

B型が多いのは、B型が「異世界と人の交流物語」で、「人間」と「異世界」が接触する物語であるから当然である。

それではB型に属する他の作品はどうか、という問題がある。まず人間と異世界が出てきても、「人間と自然」というキーワードで読めない作品がある。「月夜のでんしんばしら」「銀河鉄道の夜」などである。それらはここには挙がってこない。

それ以外の作品で、まず「雪渡り」を考えてみる。ここに登場する子ども四郎とかん子は、極めて素直で謙虚である。狐の紺三郎はじめ狐の子どもたちも友好的である。物語の最後で両者はお互いを理解しお互いに感動し、そこにはいささかの疑いも争いもない。それは同じ狐との交流を描いた「茨海小学校」にもいえる。

「さるのこしかけ」はちょっと意地悪な樵夫とちょっと意地悪な小猿が登場し、ちょっとした意地悪をされるが、山男によって事なきを得る物語であり、「紫紺染について」の「山男」と「紫紺染に熱心な人たち」の間にも、「風野又三郎」の風の精・又三郎と子どもたちの間にも争いや際立った不信任はない。それらは「自然と人間」の関係が極めて理想的なバランスの上に描かれているといっている。

ここに挙がってこないB型の作品は、「人間と自然」のキーワードで読めないか、その両者が極めて友好的な関係にある作品だということができる。

賢治童話における「自然」と「異世界」

C型は「人が中心の物語」だから、無いのはこれも当然である。

今これらの物語の関係を試みに座標の上に置いてみる。y軸に「自然」をとり、x軸に「人間」をとる。見てきたように「自然」の力が大きい時「人間」の力は小さく、「人間」の力が大きくなる時「自然」の力は小さくなる。一方がどんなに大きくなっても片方が0になることは、少なくともこれまではなかった。つまり「人間と自然」の力関係は、おおまかに反比例的に働くということが出来る。だからそのグラフは、もちろん数学的にきっちりそのグラフ上に並ぶわけではないが、 $y = \frac{1}{x}$ の軌跡をとる。

「雪渡り」のように人間と自然が友好的な関係にあるものは、人間と自然の力関係に強弱がない、同等だということでの位置する座標は $y = x$ になる。

「自然」の強弱をy軸に、「人間」の強弱をx軸にとっていくと、これまで述べてきた作品の座標はどうなるか。

例えば「水仙月の四日」の「自然」「吹雪」は強い故に値大きくy軸の上方に、無心な「人間」「子ども」は弱い故にx軸の小さい方にとる。「狼森と策森、盗森」ならば少し弱くなった「狼」「山男」の「自然」を「吹雪」より小さく、「農民」は、森に敬意を払い森より下位に自分を位置づけてはいるが、少し富を蓄え力を付けて強くなった分大きめにとる。

「かしはばやし夜」は、逆に人間の清作が強くなったから、x軸は $y = x$ （「雪渡り」の座標）をこえて大きくとり、柏の木は人間より弱い存在だから、これもy軸は $y = x$ より小さくとる。「オツベルと象」では小資本家のオツベルは強く、搾取される白象は弱い。「フランドン農学校の豚」の豚は、その白象より家畜化されたことで、より小さくyの値をとる。農学校の先生が人間として最も強いとは言えないけれど、動物から自然性を剥奪した上に立つ人間とみれば、自

賢治童話における〈自然〉と〈異世界〉

然に君臨する強い人間とみなして、x軸の最大限プラスの方向にとる。そのように先に検討した作品を、試みに反比例のグラフにのせてみると、表1のようになる。

注 拙論「宮澤賢治の方法」(『東海学園国語国文第五十七号』平成十二年三月)

4

賢治の童話を〈自然と人間〉というキーワードで読んでくると、「異世界と人の交流物語」に属する童話と重なるものが多い。〈自然と人間〉の関係は、「異世界と人間」とどのような関係にあるのか。

ここで「異世界」と呼ぶのは、人間以外の動物・植物・鉱物などが形作る世界のこと、それは昔話や寓話にはよくあるし、童話の世界にもたくさんある。ここでは特にファンタジーにいう魔界などを指しているわけではないことは、「宮沢賢治の方法」で述べたのと同じである。

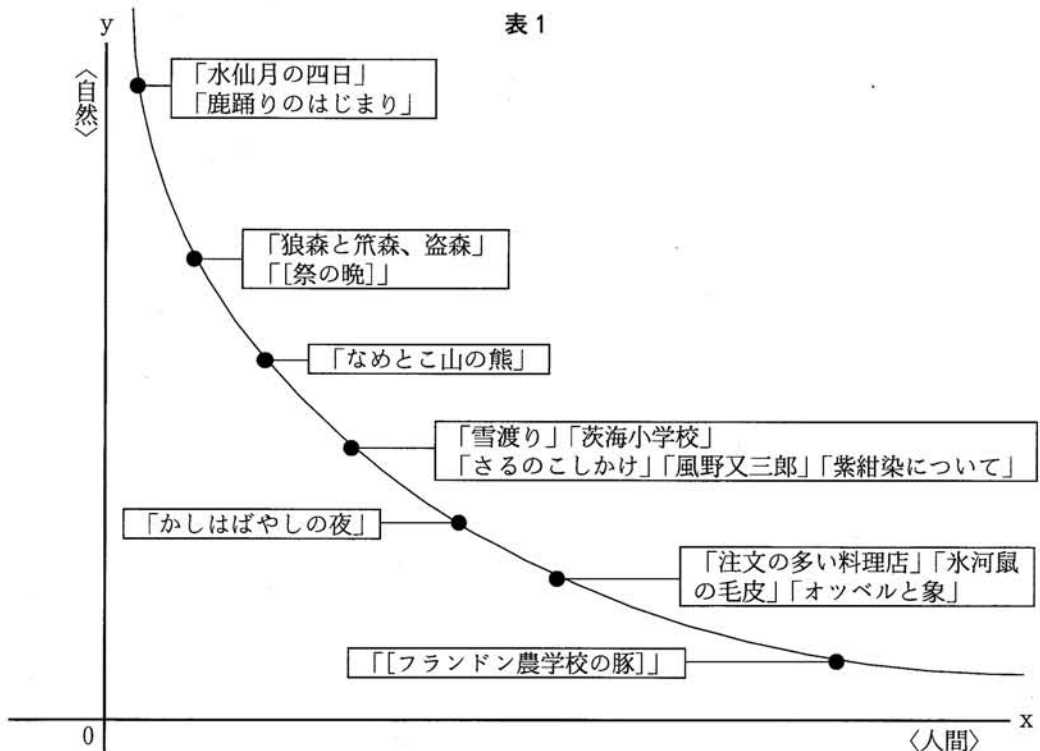
その「宮沢賢治の方法」で区分したうちの「A 異世界の物語」は、人間以外の動植物が主人公になって活躍する。その世界では原則的に人間は登場しないのだから、動植物だけの世界で物語は完結する。

また「C 人が中心の物語」も、人間界の物語だから、背景としての自然は描かれても、人間対自然という形では自然は現れない。

残るのはどうしても「B 異世界と人の交流物語」だけということになる。その「異世界」が〈自然〉といかなる関係にあるかという考察を深める前に、いったい今まで使ってきたような意味、つまり「自然破壊」とか「自然保護」といったふうに使われる意味での自然観・自然への視点を賢治が持っていたのかどうか、その詮索から始めたい。

「自然」という語にこだわって心象スケッチ(詩集)をみていくと、「春と修羅 第三集」の「二〇二 和風は河谷いっぱい吹く 一九

表1



二七、八、二〇、」の中に「あゝ自然はあんまり意外で／そしてあんまり正直だ」という詩句を見出す。この自然は、予想もしなかった開花期の雨がまともにやって来たこと、また倒された稲が起きれまいと思っていたのに、「苗のつくり方のちがひ」などが正直に影響してみんな起きたことへの感想だ。

「春と修羅 詩稿補遺」の「この医者はまだ若いので」には、「この医者はまだ若いので／夜もきさくにはね起きる、／薬価も負けあんなり自然を冒瀉してゐない」とある。この詩の校異をみると、「自然」の前に「人の病氣や死に対しては」とありそれを削って「いづれ」に直している。とするとこの「自然」は近代医学に頼らない、人間の自然の生命力を信頼する医師の態度をいっているのだらう。

「春と修羅 詩稿補遺」の「みんな食事もすんだらしく」の中に「ひでりや寒さやつぎつき雙ふ／自然の反面とたゝかふほかに」とある。この下書稿二に「の反面」が後から補ったとあるから、「ひでりや寒さ」は人間にとって自然の苛酷な面だが、自然にはそういうマイナスの面と豊饒をもたらすプラスの面があることを明らかに示している、この詩の場合は、自然の恩恵をもたらす面ではなくて、自然の苛酷な面との闘いを指しているのである。

「詩ノート」付録の「生徒諸君に寄せる」「断章五」に「宇宙は絶えずわれらに依って変化する／潮汐や風、／あらゆる自然の力を用ひ尽すことから一足進んで／諸君は新たな自然を形成するのに努めねばならぬ」とある。この場合の「自然」も、人間の味方になるような新しい自然と考えていいと思う。

この「心象スケッチ」や詩稿などの四例でみると、天然・森羅万象という大自然を指しているものは無い。むしろ自然災害などと使われる動的な自然現象、あるいは自然食などと使われるような本来的なまじりけのないものを指していると思われる。

賢治童話における「自然」と「異世界」

一方、宮沢賢治の童話の中には、先に述べたかなり現代の課題的な使い方とみられる「自然」が出てくる。

「風の又三郎」の「九月七日」の章で、「一人の変に鼻の尖った、洋服を着てわらじをはいた人が」河で「いかにもわらじや脚絆の汚なくなったのを、そのまゝ洗ふといふふう」に、もう何べんも行ったたりする」のでたまにかねた一郎の音頭で少年たちが「あんまり川を濁すなよ、／いつでも先生云ふでないか」とはやし立てる場面がある。

また「かしはばやし夜」の中にも、画かきが鉛筆が折れたのを、「じぶんの右足の靴をぬいでその中に鉛筆を削りはじめ」たのを、柏の木たちはみな感心して眺め、大王も「いや、客人、ありがたう。林をきたなくせまいとの、そのおこゝろざしはじつに辱けない」といったところ、画かきは「いゝえ、あとでこのけづり屑で酔をつくりますからな」とかわすところがある。

この場面については、現代的な自然保護の謂というよりは、村人のモラルないしは生活の知恵からの言辭であつたろうといふことはできる。

しかし「川を濁すな」、「林をきたなく」するなという明快な表現は、今でも、当時にとっては尚のこと、新鮮である。あたりまえのことはあたりまえとして、とりたてて言辭にしない慣習からいえば、それらが表現されたことで、かなり意識の表にあることを示している。

「毒もみのすきな署長さん」の場合は、これらとはまた趣を異にしている。その中では、「さてこの国の第一条の／『火薬を使って鳥をとつてはなりません、／毒もみをして魚をとつてはなりません』」

という「ブハラ」の「林野取締法」が示される。その法をものともせず、毒もみによる大量捕獲の魅力にとりつかれた署長がユーモラスに描かれている。この架空の国の火薬や毒もみの禁止法は、当時の常識的良心的な慣習であつたともいえるが、「風の又三郎」で発破での漁法がひそかに行われ、「注文の多い料理店」や「なめとこ山の

熊」で鉄砲での狩猟が行われているわけだから、この「林野取締法」の第一条には、前の二例よりは色濃く賢治の鳥や魚の大量捕獲に対する危機感が表されていると言っている。

大正から昭和の初期にかけては、大規模な自然開発や自然破壊は普通には知られていないはずだから、村人のモラルとしての自然保護意識を超えて、人間の「進歩」の結果苦境に追い込まれた動物への危機感を賢治は持ち始めていたのではないか。

もう一つ「紫紺染について」で、集まった人から山男へ「野菜はあなたがおつくりになるのですか。」と質問したのに対して山男が「お日さまがおつくりになるのです。」と即座に答えるところがある。この山男は理詰めというか細かくきんどしたところがあって、野菜をつくるのは、人ではなく太陽だというのは、人間の知力を上回る根源的な自然の威力を認めていて、それはいかにも賢治らしい認識の仕方だと思われるのである。

以上四例を見ると、賢治は、当時の人間の平均的な認識をはるかに上回る、自然に対する畏敬の念や危機感をもっていたことは確かである。

そこで次に、なぜ賢治が普通人より多く自然に対する畏敬の念や危機感を持っていたかを探らねばならない。そのところをまず「若い木霊」でみてみよう。

「若い木霊」は、「若い木霊」が「明るい枯草の丘」を歩いて、春が来たから目を覚ませと、柏の木に呼びかけるところから始まる。柏の木が応えないので「おれが来たしるしをつけて置かう」と下草を結う。栗の木にも鶉にも話しかける。木霊の胸は、春の喜びを分かち合いたいとはり裂けるばかりに高鳴るのだが、季節はまだ早く、木々たちは何も応えないまま、木霊は自分の住処の木に戻っていく。

ここには自然へのあこがれが満ちあふれている。自然を友とし自然と交流することへの賢治の歓喜が目一杯表出されているのである。

この「若い木霊」の主人公は、もちろん人間でなく木霊なのだが、この作品が微妙に影響しているのが、「サガレンと八月」と「タネリはたしかにいちにち噛んでゐたやうだった」である。このどちらも主人公は人間に代わる。

「サガレンと八月」の主人公・農学校の助手の「私」は、標本を集めにいった海岸で風や波から、「何の用でこゝへ来たの、何かしらべに来たの」などと繰り返しくどく質問される。そこで「私」は「あんまり訳がわからないな。ものと云ふものはそんなに何でもかでも何かにしなけいけいもないもんぢやないんだよ。そんなことおれよりおまへたちがもっとよくわかってさうなもんぢやないか。」と喋り出す。すると波は少したじろいて「謙遜な申し訳のやうな調子で」「おれはまた、おまへたちならきつと何かにしなけい済まないものと思つてんだ」といい、「私はどきつとして顔を赤くしてあたりを見まはす。あとは何を話したのかわからないけれど、「たゞそこから風や草穂のいゝ性質があなたがたのこゝろにうつつて見えるならどんなにうれしかれませんか」と前段を結んでいる。

自然の行為が無償に対して、人間の行為は営為にみちている。そこを自然に遠慮がちに皮肉られて、人間が恥じ入る。自然はあくまで謙虚で偉大である。そこを人間は理解したいものだ、という人間と自然の関係である。

「タネリはたしかにいちにち噛んでゐたやうだった」のタネリも人間で、柏・水ばせう・墓・栗・鶉に語りかける、という筋立てになっている。

人間と自然は、基本的に友好的で不可侵の、あるいは人間も自然のうちに大きく内包されて、つりあいのとれた状態であるものなのだろう。ところがどうやら近代は、人間の方がいつも何かしようとかくむようになった。農地の開拓、文明、生産の拡大などの人間の営みを、自然は好まないしなまない。しかしそれでも農学校の助手やタネリ

は草木との交流を求めてやまない。草木の世界は、人間世界とは別種の異世界だから、物語の上では異世界との交流の物語という形になるのである。

しかし、人間はなにゆえ自然と交流したいのだろう。それを解くカギが、「未定稿」で「構想全く不可」と作者自らが記した作品「十力の金剛石」からうかがい知ることができる。

「かすかな虹を含む乳色の蛋白石」の「うめばちさう」や「その実はまっかなルビー」の「野ばら」など、目もくらむばかりのきららかな寶石の花野に降る様々に光り輝く寶石の雨。その中で花ばなは「なあにがこんなになしかり」と歌っている。それは「十力の金剛石」が下る。だ来ない」からだ。念願かなってその「十力の金剛石」が下る。すると「すゞらの葉は今ほんたうの柔かなうすびかりする緑色の草」に変わり、「うめばちさうはすなほほんたうのはなびら」を持つようになる。その「十力の金剛石こそは露」だった。

つまり豪華ではあるが所詮石に過ぎない宝石の花ばなを、露が自然のままの生きた花ばなに変えたのだ。「そしてそして十力の金剛石は露ばかりではありませんでした。碧いそら、かゞやく太陽丘をかけて行く風、花のそのかんばしいはなびらやしべ、草のしなやかなからだ、すべてこれをのせになふ丘や野原、王子たちのびらうどの上着や涙にかゞやく瞳、すべてすべて十力の金剛石」だったというのだから、いわばすべて森羅万象は十種の知力を持つ金剛石であり、それはまた「十力の大宝珠」であり「十力の尊い舍利」、つまり十種の知力を持つ人、仏だったというのである。

露ばかりが生命を蘇らせるものではない。この天地にあるものすべて空・太陽・風・草木・大地・人間すなわち有形無形の自然と自然現象はすべて十力の金剛石であり、それらは仏であったというのである。この「十力の金剛石」は作品として「構想全く不可」であったにしろ、作者の意図は明瞭に出ているといえる。どんなに美しい花ばな

でもなぜか「さびし」い空しいものであり、真の自然の中にあるものこそが生き生きと美しいものといえる。それを可能にするのはまさに仏の力だ。

この作品は、生前未発表で執筆が大正一〇年あるいは一一年とされるが、作者自身評価できなかった理由の一つは「仏教」が出過ぎていたからと考えられる。

5

賢治童話の「自然と人間」の関係は、結局のところ「異世界と人間」の関係に置換することができる。人間が異世界と交流するということは、異世界すなわち植物や動物に代表される自然界との交流・交感であった。それが何故頻繁に描かれたかと言えば、賢治が自然界に最も根源的な仏性を見たからであったと結論づけることが可能である。

この結論は、聖なる自然界の防衛ということや変貌する人間などの問題をもつ童話を出発点としたが、導かれた結論はかならずしも独自の強いものとはいえない結果となった。

つまり童話や異世界などとは関係なく、賢治の初期の文学活動である短歌や詩を通して、到達された先学の結論がすでにあった。十分意を尽くして紹介できないかもしれないが、最後に、それらに触れておかねばならない。

境忠一は『宮澤賢治論』（桜楓社）の中の「宮澤賢治と自然」で、歌稿・初期散文・『春と修羅』の心象スケッチを考察して、「このように見えてくると、賢治は大正六年一月、数え年二十二歳のとき、一本のひのきに仏性を見出して以来、その表現は異なっても、たえず自然の中に仏性を見出していたので、それが彼の信仰を感覚に結びつけていたといえる」として、賢治の詩歌における自然の意味を論述している。

賢治童話における〈自然〉と〈異世界〉

さらに恩田逸夫「宮沢賢治の文学における『まこと』の意義」(『宮沢賢治論1 人と芸術』原子朗・小沢俊郎編 東京書籍)では、「めくらぶだうと虹」の主題とおぼしき「まこと」を追求しつつ、「三自然観」で『まこと』に至る方法として、その手がかりを自然の中に求め、自然と融合することによって達する、というのが賢治の自然観の重要な一面である」としている。

さらに「龍と詩人」に関して「賢治は自然を尊重し、自然によって生命力の根源に至る契機をつかもうとした点に特徴がある。彼の作品は、自然に関して語るのではなく、自然が賢治を通して己が姿を表しているというべきである、それゆえ、彼の作品に扱われている自然は、単に素材ではなく、挿話的な扱い方ではなく、自然そのものの本姿が示されているのである」とし、加えて「彼は自然のみを尊重したのではなく、彼が本当に希求したのは、自然及び人事のすべてを統一している原理『まこと』であったのである」としている。

そして「まこと」とについて、「おそらく、空間と時間、人事と自然を包括超越して、宇宙におけるあらゆる営みを支配する原理であり、根源力であって、『永遠なるもの』あるいは『本体』とか『真理』とかいうべきものであろう。別の言い方をすれば、絶対者であり、神であり、仏である」としている。

佐藤通雅は「賢治の自然詠」(校本宮澤賢治全集 第一巻月報)で「空虚より降りくる青き阿片光百合のにはひは波だちにつゝ」などを「歌稿A」から抄出して「いったいに賢治の場合の自然は、対象化された自然ではない。天地も人間も未分化で、おたがいに交感しあっていた。そういう原初の自然である」としている。

拙論の童話の場合は「天地も人間も未分化」のものばかりではないが、人間と自然がお互いに交感することができる、原初の形態を留めていることは基本的に同じである。

(東海学園大学教授)